

2017 7/25

No.2047

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



海の日(7月17日)、湘南に夏の到来を告げる暁の祭典「浜降祭」が茅ヶ崎市南湖の茅ヶ崎西浜海岸で行われ、式典後、帰路につく前に「みそぎ」のために海の中へ入る御輿も見られた。



政経 かながわ

2017 7/25 No.2047

contents

視点・点描	3
セーリング文化への憧れ	
社 会	4
人口減少のわなに陥る日本 全員参加型システム構築を	
まつりごと点描	8
都議選惨敗、政権に衝撃 改憲シナリオ影響か	
くらし2017	10
ニッポン受動喫煙対策「前世紀並み」	
広告珍談	12
広告はたのしい④④ みなさん、ごいっしょに	
NNAアジア経済レポート	13
神奈川景気データファイル	14
神奈川景気データファイル	15

事務局だより

◇8月定例講演会
2017年8月31日(木)
午後1時30分～3時
ホテルモントレ横浜3階「ビクトリア」
講師は同志社大学大学院ビジネス研究科教授の浜矩子さん
演題は「経済政策は何のため、誰のため～『アベノミクス』をめぐる～」

視点 点描



セーリング文化への憧れ

マリレジャーの本格的なシーズンを迎えた。中でも白い帆に風を受けて走るヨットは夏の気分を感じさせる。3年後の東京五輪では、ヨットとウインドサーフィンのセーリング競技が藤沢市江の島を拠点に実施されることから、この夏は県内でヨットに親しむイベントが数多く予定されている。

日本のセーリング競技人口は約1万人。五輪競技の中では後から数えた方が早く、国内では明らかにマイナー競技だ。普及しない理由の一つは、できる場所が限られるからだろう。そんなマイナー競技に学生時代打ち込んだ。そう話すと「優雅ですね」とセレブ感を抱いてくださる方がいるが、実際は大違いの3Kサークルだ。ヨットはマリーナに浮かぶク

ルザーではもちろんない。浜置きしたディンギーが愛艇だ。早朝から船具を積んだりヤカーを引いて砂浜に行き、一日中海に出て潮まみれになって帰ってくる。夜は砂だらけの布団で雑魚寝した。

あの生活には戻りたくないが、手軽とはいえないスポーツに取り組む絶好の環境だった。夏休みのほとんどを相模湾に面した横須賀市内の合宿所で過ごして腕を磨いた。強風下、バランスを取るため体を乗り出し、海面すれすれで味わうスピード感は格別だった。

おかげさまで世界選手権にも出させてもらったが、オーストラリアに行つて衝撃を受けた。彼の地では手軽なスポーツだったのだ。

大会を主管したパースのクラブの会員たちは、ヨットを乗せたトレーラーを自家用車で引いて集まってくる。仕事が終わった夕方から軽く乗りに来る人がいたり、

乗らないのに顔を出したりするメンバーもいた。クラブハウスにはバーカウンターがあり、仲間同士がヨット談義に花を咲かせていた。

そもそも住環境や余暇時間が違うので単純比較はできないが、幅広い世代がヨットを楽しむ文化が確立していてもうらやましかった。ちょうど30年前の話だ。

その後も日本のヨット環境に変化はないだけに、五輪は大きなチャンスだ。大会後のレガシーとして神奈川にセーリング文化ができれば言うことはない。

本紙横浜版によると、横浜・八景島で開かれていた初心者向けのスクールは中高年層でにぎわっているという。激しい動きが少ないヨットは生涯楽しめる。始めるのに遅いことはない。風の力だけで走る楽しさを味わってほしい。

(神奈川新聞社整理部長

岡部 伸康)

みなさん、びいにくしよに

まず、図をご覧ください。

客船「ばしふいっく びいなす」

に乗って、日本1周するクルーズのパンフレットである。背景に妙高高原のいもり池、白い大きなフネが「ばしふいっく びいなす」号。なにやらこわそうな「いもり池」を航行するのではなく、太平洋から日本海、瀬戸内海をいく。つまり、海を航海するのである。

クルーズは夕方、横浜港を出港する。これがすばらしい。みなとみらいのビルとビルが夕陽に照らされて、地上では見られない景観。出港を祝してふるまわれるシャンパン。回転展望台の、しあわせそうなおふたりさんに乾杯！
ダイニングルームでまたも乾杯。翌朝、北海道は苦小牧。上陸して、支笏湖やウトナイ湖を見物。

フネは津軽海峡をぬけて日本海へ。直江津と鳥取でも上陸して観光。フネは沖の島をまわって、平戸から宇部へ。もちろん上陸する。

フネは瀬戸内海をゆったりと神戸へ。紀伊半島を見ながら横浜へ。11日間の船旅、すばらしい。さあ、みなさん、いっしょにと。ところがみなさんはこういう。乗ったらすぐ、船酔いする。新幹線など鉄道なら、さつさと目的地に着いて、いろんなところを観光できる。なによりも、船旅はお金がかかりそうと。ちがう、ち

がう。北海道から九州まで、フネは乗ったままで連れてつくれる。荷物はフネに置いて、手ぶらで上陸。オプション（別料金）だけれど、あつちこつちへ行ける。こんなゆったりした旅は、フネなればこそだろう。

このクルーズはほぼ42万円から。日割りにすると4万円、航海費はもちろん3食つき。早朝のコーヒーから夜中の軽食まで。なんやかんやと飲んだり食ったり、昼寝したり、すべてふくまれてるから（アルコールは別）高くない。



フネに乗ると、わが家のような気になってくる。ましてや《法医学教室》の筆者・西丸興一さんが、「ばしふいっく びいなす」のシッブスドクターだからなおさら。船酔いしなくても、酒酔いするボクをなんとかしてくれて、また酒酔いするのである。そんなボクを、もうめんどろみられないと、ドクターは陸にあがってしまった。だけど西丸さんの後輩先生が、ボクを救ってくれるからまた乗るのである。
はてさて、パンフレットとは広告媒体のひとつ。その最初は1601年、イギリスの「冒険貿易商会」が発行した。日本で最初は1786（天明6）年、作家・こいかわはるまち恋川春町が執筆した『三舩増鱗（はしまり）祖』を宣伝するため、配ったとされる。
（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）
（図）2017年10月、客船「ばしふいっく びいなす」日本1周クルーズのパンフレット